

乳幼児健康診査を通じた育児支援： 育児ストレス尺度の開発

手島聖子*, 原口雅浩**

Childcare Support Through Infant Health Checkups: Development of the Childcare Stress Scale

Seiko TESHIMA and Masahiro HARAGUCHI

Abstract

This paper describes the development of an instrument, the childcare stress questionnaire. The questionnaire consists of four scales: childcare stressors, childcare anxiety, social support, and childcare attitudes. Statements on the four scales were identified from the literature and redesigned to describe childcare situations that, according to the advice of experts on childcare, result in stress. Questionnaires were mailed to 105 parents with 4-month-old children and 82 parents with 18-month-old children and then collected at the infant health checkups. Major findings were as follows: 1. As a result of factor analysis using an unweighted least squares factoring followed by a varimax rotation, three factors were extracted for childcare anxiety scale and social support scale, and two factors were extracted for childcare attitude scale. These scales closely parallel the conceptual categories of childcare stress upon which each scale was based. 2. Internal consistency indicated that all the subscales were reliable. 3. There was a positive correlation between the number of childcare stressors and the degree of childcare anxiety. 4. The correlation between social support and childcare anxiety was negative. The results showed that this questionnaire was useful to identify parents who needed help with childcare through infant health checkups.

Key Words: childcare anxiety, childcare stress, infants health checkups

要 旨

本論文は、育児ストレス質問紙の作成について述べたものである。育児ストレス質問紙は、育児ストレスサー、育児不安、育児ソーシャル・サポートと育児観の4つの尺度から構成されている。4つの尺度の項目は、先行研究より収集し、育児の専門家の助言を得て、育児ストレスを適切に表すように再構成したものである。質問紙を4カ月児の養育者105名と1歳6カ月児の養育者82名に郵送し、乳幼児健康診査時に回収した。主な結果は、以下の通りである。(1)最小二乗解、バリマックス回転による因子分析の結果、育児不安は3因子、育児ソーシャル・サポートは3因子、育児観は2因子が抽出された。これらの因子は、育児ストレスの概念にそったものであった。(2)それぞれの因子の内的整合性は高く、信頼性が得られた。(3)育児ストレスサーは育児不安と正の相関が認められた。

*福岡県立大学看護学部成人看護学講座

Department of Adult Nursing, Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University

**久留米大学文学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395

福岡県立大学看護学部成人看護学講座 手島聖子

E-mail: teshima@fukuoka-pu.ac.jp

(4) 育児ソーシャル・サポートは育児不安と負の相関が認められた。これらの結果は、この質問紙が、乳幼児健康診査を通して、育児の援助を必要としている養育者を把握するのに有効であることを示している。

キーワード：育児不安、育児ストレス、乳幼児健康診査

緒言

核家族で育児をしている養育者が増えた現在、養育者が孤立した状況に陥りやすく、虐待などの問題が深刻となっている。日本の乳幼児健康診査のシステムは、国際的にも高い水準にあり、受診率も高いといわれているため、この既存の母子保健システムを有効に活用して、子どもの虐待予防システムを地域に構築するために事業を展開する市町村も出てきた。しかし、まだ多くの市町村では、乳幼児を抱える養育者側の不安や葛藤を十分に受けとめた育児への援助は実施できていないのが現状である。

乳幼児健康診査は、子どもの健康、発達状態だけでなく、子育て真最中の養育者の精神的な問題を理解できる絶好の機会でもある。従来保健指導において、保健師は、子どもの発達段階にばかり気をとられ、乳幼児を抱える養育者側の内面の危機問題についてはふれず、子どもの発達に応じた指導しか行えていないことが多かった。これからの乳幼児健康診査では、子どもの発達心理だけでなく、子どもの発達過程に伴う養育者の育児不安や育児ストレスに対する援助を行うことが重要である。

本論文は、乳幼児健康診査において、心理的・社会的に困難な状況におかれている養育者の育児ストレスを早期に把握するために横断的調査に加え、コホートの調査や縦断的調査および面接調査を実施し、尺度の有用性や育児不安の縦断的变化について検討することで、母子保健システムに虐待の視点を取り入れた多層的な育児支援システムのあり方を考察することを目的とした一連の研究の中から、育児ストレス尺度の開発について述べたものである。

牧野(1982)が、育児不安を「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」と定義して以来、育児不安の研究が多く行われるようになったが、育児不安と育児ストレスの概念は、曖昧で多義的なものが多い。越、坪田(1991)、田中(1997)、難波、田中(1999)は、育児不安と育児ストレスを同じ概念として取り扱っていた。佐藤、菅原、戸田、島、北村(1994)、難波、田中(1999)、日下部、坂野

(1999)は、育児ストレスを、刺激(ストレッサー)としてとらえており、牧野(1982)、川井ほか(1994, 1995, 1996, 1997)、佐々木、高梨、本郷(1991)は、育児不安を育児ストレスによって生じるストレス反応としてとらえていた。田中、難波(1997)は、牧野(1982)の育児不安尺度の項目には、ストレッサー項目とストレス反応項目が混在していることを指摘している。

さらに、子どもの発達段階に応じた養育者の育児ストレスの質的な違いを指摘した論文は少なく、乳幼児と一緒に分析し(牧野, 1982)、すべてを包括的にとらえたり、対象児の年齢を限定したりしたもの(佐藤ほか, 1994)などが多い。

佐藤ほか(1994)は、母親の育児関連ストレスは子どもの年(月)齢によって内容が変化するので、子どもの年(月)齢を狭くしたほうがよいこと、乳児の母親についてのデータが少ないこと、生後6か月から7か月にかけては離乳や夜泣きが始まること、子どもの運動や発育についての心配が出るなどにより電話相談の件数が多くなる(池田, 1984)、という諸事情を総合的に勘案して、6か月児をもつ母親を対象としていた。

川井ほか(1994, 1996)が、調査対象を0歳から2歳児をもつ母親とした理由は、育児の心配が、現在、過去ともに、育児困難感の高いものに多く、とくに2歳前後に顕著にみられ、かつこの時期に手助けを最も求めているからである。さらに、今後、児の年齢を幼児期後半まで広げることにより、発達段階に依拠する育児不安を見出す試みをすべきであることを指摘している。

田中、難波(1997)は、実際に育児ストレスを測定しようとする、子どもの年(月)齢とともにその内容とストレス度は変化してくることが推測されると述べている。また、佐藤ほか(1994)は、12か月時と18か月時のデータとの比較検討によって6か月時点での母親のストレスがどのように変容するのか、その要因はどのようなものかという検討を行い、より現実的な提案をしていきたいと述べている。

日下部、坂野(1999)は、先行研究から3歳児の母

親が育児ストレスを強く感じていること、また、3歳児をもつ母親は、子どもが幼稚園や保育園に通っていない人が多く、保育経験者および同年齢の子どもをもつ親との接触が少なく、よりストレスを抱えていると考えられることから、3歳児の母親を対象として、育児ストレス尺度の作成を試みた。その結果、発達段階に応じてストレスも変化していくことが分かり、今後、子どもの年齢によるストレスの経時的変化について調査を行い、子どもの年齢に応じた尺度を作成する必要性を述べている。

これらの研究は、どの年齢の子どもをもつ養育者にも共通するストレスと子どもの発達過程によって異なるストレスがあること、さらに、養育者のストレス反応は変わらなくても、子どもの発達過程によって養育者の育児ストレスは異なることを示唆しており、養育者の育児ストレスを測定するためには、子どもの発達過程に応じたストレスとストレス反応の2種類の尺度を作成する必要性について指摘している。

そこで、本研究では、Lazarus and Folkman(1991)の心理的ストレス過程モデルに従い、育児ストレスを過程としてとらえ、養育者を煩わせる育児中の子どもの行動や態度を育児ストレス、その育児ストレスによって引き起こされる養育者の心の状態(ストレス反応)を育児不安と定義し、A町の乳幼児健康診査を利用して、乳児期(4カ月児)と幼児期(1歳6カ月児)の養育者の葛藤および子どもの発達段階に応じた育児ストレスと育児不安を明らかにする尺度の作成を目的として調査を行った。

調査対象者を乳児期および幼児期の養育者とした理由は以下のとおりである。乳児期の養育者の育児環境は、現在、核家族で居住する養育者が増え、マンション等の一室で孤立無援な状況に置かれがちであることから、育児不安が高くなることが特徴として挙げられる。幼児期の養育者は、子どもの「自我の誕生」に伴う自己主張の強まりが生み出す親子関係の葛藤から育児ストレスが生じやすい。したがって、乳児期と幼児期では、養育者のストレスも質的に異なることが予測されるため、市町村における初めての乳幼児健康診査で、受診率の高い4カ月児健康診査と母子関係にとって一つの危機的状況と言える時期である1歳6カ月児健康診査を利用して調査を行うこととした。

予備調査

目的

乳児期と幼児期の養育者の葛藤および子どもの発達段階に応じた育児ストレスと育児不安を明らかにする質問紙を作成する。

方法

1. 調査対象者と時期

A町の乳幼児健康診査で対象となった乳幼児の養育者に対して、質問紙を事前に郵送し、健康診査に養育者が来所された際に個別に回収した。4カ月児健康診査の対象者は、2000年5月は59名、6月は35名、7月は33名の計127名であった。1歳6カ月児健康診査の対象者は、2000年5月は30名、6月は40名、7月は41名の計111名であった。4カ月児健康診査については、5月、6月、7月の3カ月間で計114名(回収率89.8%)から回答が得られ、1歳6カ月児健康診査については、5月から7月の3カ月間で計93名(回収率83.8%)から回答が得られた。

2. 質問項目の選定

育児ストレスを測定する質問紙に関する先行研究(日下部, 坂野, 1999; 川井ほか, 1994, 1995, 1996, 1997; 牧野, 1982; 難波, 田中, 1999; 佐々木ほか, 1991; 佐藤ほか, 1994; 田中, 難波, 1997)をレビューし、質問項目を整理・分類した。その結果、これまでの質問項目は大きく、育児ストレス、育児不安(情動的ストレス反応, 身体的ストレス反応含む)、パーソナリティ、育児ソーシャル・サポート、育児観の5つに分類できた。対象者を4カ月および1歳6カ月児の養育者にしたため、発達段階に合わない質問項目を削除した。育児ストレスについては、両方の年齢に共通した項目と各発達段階に応じた項目を用意し、育児不安については、育児と関連のない一般的なストレス反応項目を削除した。さらに、乳幼児健康診査に携わったことがある保健師などに調査の主旨を説明し、不適切な項目がないか、質問内容がわかりやすいものであるかなどの助言を受け、表現を一部訂正し、新たな項目を追加した。なお、パーソナリティについては、神経症的傾向2項目、外向性3項目と、項目数が少ないことから、今回は採用しなかった。

3. 質問紙の構成

1) フェースシート

記入者、家族構成、夫と妻の職業、帰宅時間、育児

サークル活動の有無, 夫と妻の健康状態, 昼間にお世話をしている人について尋ねた。

2) 育児ストレス尺度

育児中の養育者へのストレス (子どもの行動や態度) を測定するもので, 4カ月児は19項目, 1歳6カ月児は30項目からなる。回答は経験頻度を, 「ほとんどない」から「いつもある」までの4段階で評定させ, さらに, その時の強度を, 「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で評定させた。

3) 育児不安尺度

養育者が育児中に生じる心の状態を尋ねる38項目からなる。回答は感じる程度を, 「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で評定させた。

4) 育児ソーシャル・サポート尺度

養育者の育児環境について尋ねる13項目からなる。回答はあてはまる程度を, 「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの4段階で評定させた。

5) 育児観尺度

養育者の育児に対する考え方について尋ねる12項目からなる。回答は感じる程度を, 「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で評定させた。

4. 調査実施にあたっての倫理上の注意

調査対象者に対し, 調査への協力依頼文書の中で, この調査は, A町役場健康課の協力を得て, 乳幼児を養育されている方々への育児支援を目的とする旨を記載した。さらに, 調査は匿名で行い, 回答結果はコンピュータ処理するので, 個人の回答が外部に知られることはなく, 結果は学術的な目的以外に使用しないことを記載した。

5. 分析方法

因子分析は, 最小二乗解, バリマックス回転で行い, 信頼性 (内的整合性) はクロンバックの α 係数を求めた。統計的解析には, Windows版 SAS システム Ver 6.0 を用いた。

結果と考察

1. 調査対象者の属性

調査対象者の主な属性を表1に示す。今回, 調査対象者としたA町の養育者の全体像は, 「30歳前後の夫婦で, 夫がサラリーマン, 妻は専業主婦, 2歳以下の子どもが一人あるいは二人の核家族」と解釈できた。

2. 育児ストレス

4カ月児の育児ストレス項目では, 「抱いても

しっくりこない」や「あやすと笑顔が出る (逆転項目)」など度数が偏った項目も存在したが, 育児に関する専門家の助言等を参考に項目内容を総合的に判断した結果, 「病気をする」を「病気になる」と表現の修正を行った以外, 本調査においても予備調査と同じ19項目で実施することとした。1歳6カ月児の育児ストレスの項目数は, 4カ月児と比較して多かったため, 度数分布や項目内容を検討し, 同じような項目をまとめたり, ストレスとして不適切な項目を削除したりした。さらに, 若干表現を修正し, 全22項目からなる育児ストレス尺度を作成した。

3. 育児不安

因子分析を行った結果, 固有値の落差や因子に含まれる項目数などを考慮して, 3因子 (累積説明率, 37.1%) が抽出された。第1因子は, 「子どもを育てることに負担を感じる」, 「つい感情的に接してしまう」などの子どもや育児に対する感情に関する項目の負荷量が高いことから, 「育児感情」因子と名づけた (説明率, 15.1%)。第2因子は, 「何となく育児に自信がもてない」, 「母としての能力に自信がない」など子育てに対する不安に関する項目の負荷量が高いことから, 「中核的育児不安」因子と名づけた (説明率, 12.7%)。第3因子は, 「一人になれる時間がない」, 「自分の時間がない」など時間に関する項目に負荷量が高いことから, 「育児時間」因子と名づけた (説明率, 9.3%)。

各因子とも, 因子負荷量の絶対値が, 4以上の項目を採択すると, 第1因子は11項目, 第2因子は12項目, 第3因子は7項目の計30項目となった。この30項目の質問に不適切な項目がないか, 質問内容がわかりやすいものであるかなどについて, 育児に関する専門家の助言を受け, 項目を削除したり, 一部表現を訂正したりした結果, 第1因子9項目, 第2因子9項目, 第3因子6項目の計24項目からなる育児不安尺度を作成した。採用された項目で, 因子毎に α 係数を算出した結果, 第1因子は $\alpha = .843$, 第2因子は $\alpha = .822$, 第3因子は $\alpha = .773$ といずれも高い信頼性が認められた。

4. 育児ソーシャル・サポート

因子分析を行った結果, 2因子 (累積説明率, 36.7%) が抽出された。第1因子は, 「夫が期待したほど手助けしてくれない」, 「夫が家事に非協力的である」, など夫の育児への関与に関する項目の負荷量が高いことから, 「夫 (パートナー) 関連」因子と名づけた (説明率,

表1
調査対象者の属性

属性	予備調査		本調査		
	4カ月 (n=114)	1歳6カ月 (n=93)	4カ月 (n=95)	1歳6カ月 (n=67)	
夫の年齢	-24	13	7	6	3
	25-29	42	26	30	20
	30-34	39	26	35	26
	35-	19	31	23	15
妻の年齢	-24	15	7	8	6
	25-29	50	42	38	26
	30-34	37	30	34	26
	35-	12	14	15	9
子ども数	1人	59	46	47	39
	2人	28	31	33	24
	3人	6	4	14	3
	4人以上	4	3	1	1
夫の職業	サラリーマン	75	64	71	47
	教員	2	3	3	2
	公務員	8	5	5	3
	自営業 その他	18 6	10 7	6 8	7 5
妻の職業	専業主婦	93	74	70	49
	フルタイム	4	9	2	9
	パートタイム	0	4	1	6
	育児休業 その他	11 4	1 4	16 3	1 2

注. 不明は除いている

21.3%)。第2因子は、「自分と子どもだけの世界で、社会との接点がない」、「仕事を辞め、社会との関連が切れた」などの社会的な関わりや育児環境に関する項目の負荷量が高いことから、「育児環境」因子と名づけた(説明率, 15.4%)。各因子とも、因子負荷量の絶対値が.4以上のものを採択すると、第1因子は5項目、第2因子は3項目の計8項目となった。 α 係数を算出した結果、第1因子は $\alpha = .842$ 、第2因子は $\alpha = .685$ であり、第1因子は信頼性が高かったが、第2因子は低かった。

調査対象者の自由記述の分析や保健師や虐待が専門分野の研究者など育児に関する専門家との検討の結果、予備調査で用いた質問項目では養育者に対する育児ソーシャル・サポートを十分に測定できていないという結論に達した。そこで、尺度を作成するにあたり、これからの育児環境には、「居場所作り」、「育児ヘルプ」、「精神的サポート」の三つの課題があると考えた。

第一の「居場所作り」とは、子どもの場合は、子どもが安心して遊ぶことができる場所、特に歩いて行くことができる公園などが身近にあることであり、養育

者の場合は、安心して子育てについて話し合える人や場所があることが考えられる。養育者の育児が孤独になりやすい背景には、町の催し物やレジャー情報、サークルや学習などの情報が入手しにくいことがある。養育者がいつでも気軽に最新の情報を手に入れることができるためにも「居場所作り」のシステムは必要である。

第二の「育児ヘルプ」は、専門家によるサポートとして、育児についていつでも相談できる場所があることや育児に関する情報提供などが挙げられる。また、育児代替の共助的サポートとして、育児は夫に手助けしてもらって行うものではなく、夫婦の共同作業として営まれることが重要である。調査を実施した町では、育児は思ったよりも大変な仕事だと考えている養育者が多くおり、短時間でも育児を代替できる人がいることが重要である。

第三の「精神的サポート」は、夫からのサポートとして、夫婦で子どもの様子について話し合える関係がある。心配事を相談できる関係が、多くの養育者である妻にとってのサポート源となる。核家族で子どもを

養育している場合、育児における不安や悩みを一人で抱え込んで、誰にも援助を求められない状況となる養育者が多い。育児に関する知識は、育児書で知ることはできても、先輩ママのちょっとした知識を聞くことができる場所や育児に関する専門家に気軽に話ができる場所があれば、養育者の不安の軽減につながる。

上述した三つのサポートをふまえ、因子分析の結果から、項目内容を検討し、育児ソーシャル・サポート尺度として不適切な項目を削除したり、新たに項目を追加したり、文言を修正したりして、20項目からなる育児ソーシャル・サポート尺度を新たに作成した。

5. 育児観

因子分析を行った結果、2因子(累積説明率, 21.9%)が抽出された。第1因子は、「子育ては自分にとって生きがいである」、「いまとは違う別の生き方をしてみたいと思うことがある」に因子負荷量が高いことから、「養育者の生きがい」因子と名づけた(説明率, 14.0%)。第2因子は、「子どもを育てるためには自己犠牲もやむをえない」、「育児は母親が中心となるものだ」に因子負荷量が高いことから、「育児生きがい」因子と名づけた(説明率, 7.9%)。各因子とも、因子負荷量の絶対値が、3以上の項目を採択すると、第1因子は5項目、第2因子は3項目の計8項目になった。因子毎に α 係数を算出した結果、第1因子は $\alpha = .629$ 、第2因子は $\alpha = .554$ であり、いずれも信頼性は得られなかった。

育児観を「養育者の育児に対する考え方」と定義し、養育者(主に妻)の価値観や人生観、生育暦などに大きな影響を受けるものであると考えた。本来、育児は妻だけが行うべきものではないが、夫は日中仕事に出かけ子どもと過ごす時間が短く、母親である妻が中心となり育児が行われていることが多いというのが現状である。子どもは両親に育てられるものだと子どもの権利条約第7条1(永井, 寺脇, 1994)にも規定されており、育児において誰が担い手となるべきなのかを改めて問い直さなければならない。また、育児は楽しいもので、育児は母親がすべきものという社会的な価値観にとらわれている養育者や周囲の人も多い。しかし、そうした昔からの価値観にとらわれては、核家族が中心となった現代の育児環境には適応できないものと考えられる。

育児に関する専門家らと検討し、社会的な価値観を把握した育児観尺度でなければ、育児ストレスを測定

できないと考え、井上, 江原(1999)や柏木, 永久(1999), 小出(1999)を参考に、新たに10項目からなる育児観尺度を作成した。

本調査

目的

予備調査の結果の分析から新たに作成した質問紙を用いて、4カ月児および1歳6カ月児乳幼児健康診査において調査を行い、尺度の信頼性と因子的妥当性について検討する。さらに、養育者における育児支援システムのありかたの方向性を見出すことを目的とする。

方法

1. 調査対象と手続き

A町の乳幼児健康診査で対象となった乳幼児の養育者に対して、調査票を事前に郵送し、健康診査に養育者が来所された際に個別に回収した。4カ月児健康診査の対象者は、2000年8月は47名、9月は58名の計105名であった。1歳6カ月児健康診査の対象者は、2000年8月は34名、9月は48名の計82名であった。4カ月児健康診査は、8月、9月の2カ月間で計95名(回収率90.5%)から回答が得られ、1歳6カ月児健康診査は、8月から2月の2カ月間で計67名(回収率81.7%)から回答が得られた。

2. 質問紙の構成

1) フェースシート

記入者、家族構成・同居家族および近所にいる家族の有無、夫と妻の職業、帰宅時間、昼間にお世話をしている人、育児サークル活動の有無、夫と妻の健康状態について尋ねた。

2) 育児ストレス尺度

育児中の養育者へのストレス(子どもの行動や態度)を測定するもので、4カ月児は19項目、1歳6カ月児は22項目からなる。回答は経験頻度を、「ほとんどない」から「いつもある」までの4段階で評定させ、さらに、その時の強度を、「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で評定させた。

3) 育児不安尺度

養育者が育児中に生じる心の状態を尋ねる24項目からなる。回答は感じる程度を、「全く感じない」から「非常に感じる」までの4段階で評定させた。

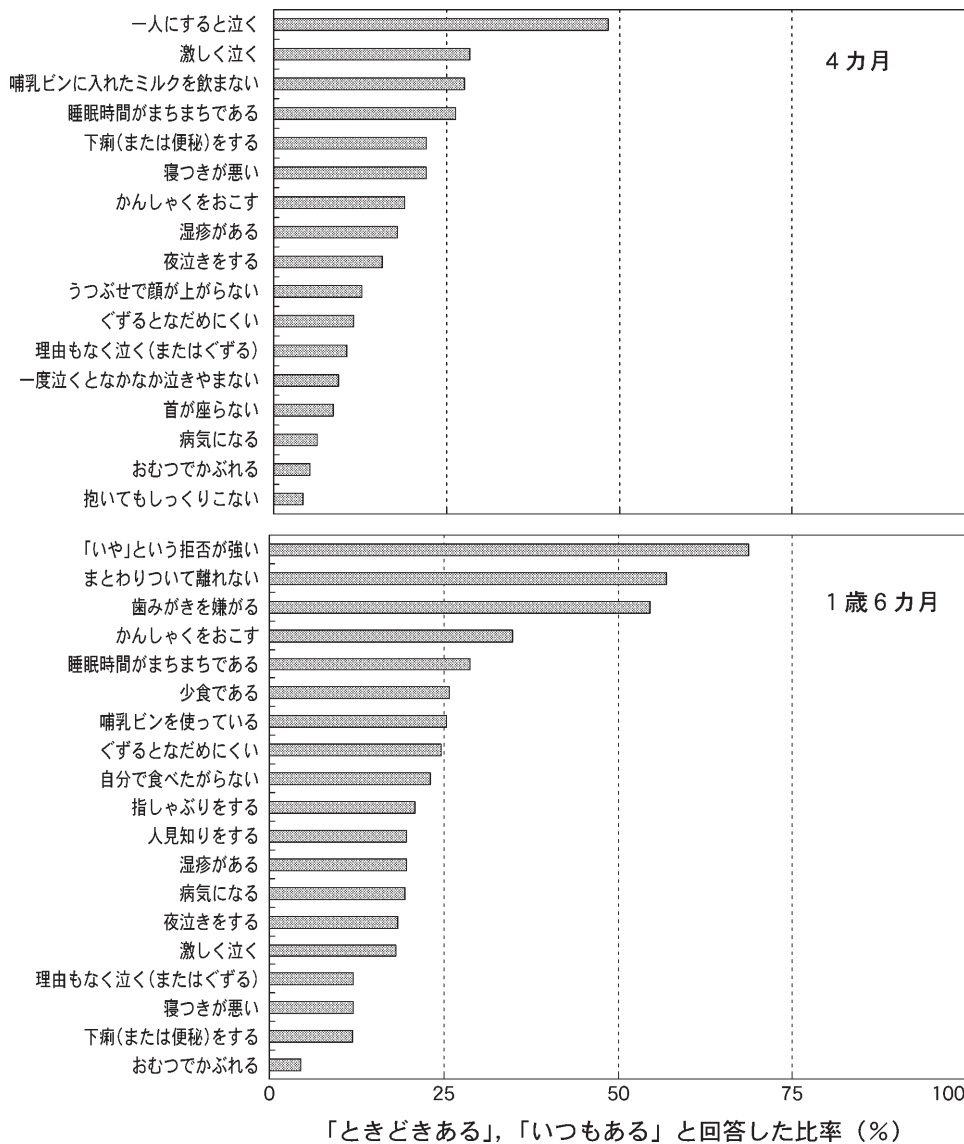


図1 育児ストレス各項目の頻度について、「ときどきある」か「いつもある」に回答した調査対象者の比率(%)。ただし、肯定的な項目は除いてある。

4) 育児ソーシャル・サポート尺度

養育者の育児環境について尋ねる 20 項目からなる。回答はあてはまる程度を、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 4 段階で評定させた。

5) 育児観尺度

養育者の育児に対する考え方について尋ねる 10 項目からなる。回答は感じる程度を、「全く感じない」から「非常に感じる」までの 4 段階で評定させた。

なお、平均値の差の検定は、対応のない t 検定を用い、尺度得点間関係を見るためにピアソンの相関係数を求めた以外、分析方法と調査実施にあたっての倫理上の注意は予備調査と同じであった。

結果

1. 対象者の属性

調査対象者の主な属性を表 1 に示す。今回、調査対象者とした A 町の養育者の全体像は、予備調査と同じく、「30 歳前後の夫婦で、夫がサラリーマン、妻は専業主婦、2 歳以下の子どもが一人あるいは二人の核家族」と解釈できた。

2. 育児ストレス

育児ストレス各項目について「ときどきある」、「いつもある」と回答した比率を図 1 に示す。4 カ月児では、「一人にすると泣く」が約 50%、1 歳 6 カ月児では、「いやという拒否が強い」が約 70%、「まとわりついて離れない」、「歯みがきを嫌がる」が 50% 以上い

表 2
育児不安の因子分析表

項 目	中核的 育児不安	育児感情	育児時間	共通性
子育てに失敗するのではないかと思うことがある	0.712	0.198	0.211	0.591
母としての能力に自信がない	0.704	0.320	0.192	0.635
何となく育児に自信が持てない	0.673	0.293	0.293	0.625
どうしついたらよいか分からない	0.660	0.206	0.181	0.511
育児についていろいろ心配なことがある	0.659	0.055	0.158	0.462
この先どう育てたらいいのか分からない	0.629	0.241	0.213	0.499
子どもの発育・発達が気にかかる	0.578	-0.163	0.007	0.361
よその子どもと比べて落ち込んだり自信をなくしたりする	0.514	0.391	0.170	0.446
つい感情的に接してしまう	0.458	0.457	0.293	0.504
育児について何かにつけ後悔する	0.451	0.406	0.156	0.393
子どもをわずらわしいと思うことがある	0.267	0.651	0.373	0.634
子どもを育てることが負担に感じる	0.346	0.632	0.339	0.634
子どもと一緒にいるとき、心がなごむ	-0.002	-0.580	0.076	0.342
子どもといっしょにいると楽しい	0.049	-0.580	-0.010	0.339
子どもを生まなければよかったと思う	0.165	0.570	0.199	0.392
子どもを虐待しているのではないかと思うことがある	0.214	0.533	0.135	0.348
子どもを憎らしいと思うことがある	0.221	0.531	0.274	0.406
育児意欲がない	0.243	0.481	0.254	0.355
自分の時間がない	0.083	0.251	0.816	0.736
1人になれる時間がない	0.220	0.059	0.721	0.572
子どものために仕事や趣味を制約される	0.109	0.188	0.636	0.452
自分のペースが乱れる	0.309	0.383	0.500	0.492
家事を全てする時間がない	0.318	0.099	0.491	0.352
毎日同じことの繰り返しをしている	0.104	0.036	0.437	0.203
説明分散	4.381	3.762	3.139	11.283
説明率	18.3	15.7	13.1	47.0

表 3
育児ソーシャル・サポートの因子分析表

項 目	精神的 サポート	育児 ヘルプ	居場所 作り	共通性
その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる	0.862	0.201	-0.108	0.795
子どもの心配事があるときに夫（妻）に相談できる	0.843	0.249	-0.074	0.778
夫は妻をよく理解してくれている	0.719	0.194	-0.094	0.563
夫は妻の代わりに育児や家事ができる	0.527	0.064	-0.054	0.285
私一人で子どもを育てている	-0.444	-0.212	0.161	0.268
子育てをしているなかで、家族と意見が合わないことがある	-0.185	-0.038	0.177	0.067
子どもの心配事があるときに相談できる人がいる	0.199	0.735	-0.189	0.616
子育てをするなかで感じたことを安心して話すことができる人がいる	0.281	0.662	-0.183	0.551
歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる	0.115	0.655	-0.346	0.562
短時間でも預かってくれる人が近くにいる	0.035	0.608	-0.232	0.425
母乳育児や離乳食など、子育てについて話し合える人が身近にいる	0.293	0.570	-0.421	0.588
育児の仕方を相談できる人（医師・保健婦などの専門家）がいる	0.283	0.404	-0.075	0.249
子どもと歩いて遊びに行く公園などが身近にある	0.113	0.325	-0.025	0.119
同じ年くらいの子ともと遊ばせる機会がない	-0.019	-0.023	0.703	0.495
同じ年くらいの子ともをもつ母親と話す機会がない	-0.095	-0.197	0.697	0.534
子育てのことを継続的に話せる機会がない	-0.328	-0.264	0.584	0.518
同世代の子ともを持つ家族とのつきあいがいい	-0.124	-0.121	0.565	0.349
子どもを預けたり預かったりする子育ての仲間が身近にいる	0.156	0.197	-0.387	0.213
移動の手段が乏しく車がないと外出しにくい	0.054	-0.211	0.378	0.190
子育てに関するサークル活動、催し物やレジャーなどの情報を得られる	0.271	0.241	-0.301	0.222
説明分散	3.02	2.83	2.54	8.39
説明率	15.1	14.1	12.7	41.9

表4
育児観の因子分析表

項目	父親育児参加	母性神話	共通性
育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である	0.935	-0.051	0.877
子育ては母親一人のものではなく、父親との共同によるものだ	0.776	0.025	0.603
父親の乳幼児期からの育児参加は必要だと思う	0.759	0.026	0.577
子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい	0.411	-0.250	0.231
子どものためには、自分が犠牲になるのしかたがない	0.317	0.231	0.154
必ずしも母親でなくても、愛情を持って育てればいい	0.283	-0.180	0.112
育児は母親が中心となるものだ	-0.069	0.700	0.495
子どもを育て、家庭を守るのが女性の責任であると思う	-0.018	0.674	0.455
子どもが3歳くらいまでは母親が育てた方がいい	-0.015	0.634	0.402
子どもを他人に預けてまで、母親が働くことはないと思う	-0.048	0.588	0.348
説明分散	2.41	1.84	4.25
説明率	24.1	18.4	42.5

た。育児をするうえで、養育者はいろいろな不安や悩みを同じようにかかえている。

2) 育児不安

因子分析を行った結果、固有値の落差や因子に含まれる項目数、項目内容などを考慮して、3因子(累積説明率, 47.0%)が抽出された(表2)。第1因子は、「子育てに失敗するのではないかと思うことがある」、「母としての能力に自信がない」などの子どもや育児に対する感情に関する項目の負荷量が高いことから、「中核的育児不安」因子と名づけた(説明率, 18.3% : $\alpha = .875$)。第2因子は、「子どもをわずらわしいと思うことがある」、「子どもを育てることが負担に感じる」など子育てに対する不安に関する項目の負荷量が高いことから、「育児感情」因子と名づけた(説明率, 15.7% : $\alpha = .805$)。第3因子は、「自分の時間がない」、「1人になれる時間がない」など時間に関する項目に負荷量が高いことから、「育児時間」因子と名づけた(説明率, 9.3% : $\alpha = .812$)。

3. 育児ソーシャル・サポート

因子分析を行った結果、3因子(累積説明率, 41.9%)が抽出された(表3)。第1因子は、「その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる」、「子どもの心配事があるときに夫(妻)に相談できる」など妻の育児における精神的安定に関する項目の負荷量が高いことから、「精神的サポート」因子と名づけた(説明率, 15.1% : $\alpha = .831$)。第2因子は、「子どもの心配事があるときに相談できる人がいる」、「歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる」などの育児代替の共助的サポートに関する項目の負荷量が高い

ことから、「育児ヘルプ」因子と名づけた(説明率, 14.1% : $\alpha = .829$)。第3因子は、「同じ年くらいの子ともと遊ばせる機会がない」、「同じ年くらいの子ともをもつ母親と話す機会がない」などの妻の家庭以外での居場所作りに関する項目の負荷量が高いことから、「居場所作り」因子と名づけた(説明率, 12.7% : $\alpha = .747$)。

4. 育児観

因子分析を行った結果、2因子(累積説明率, 42.5%)が抽出された(表4)。第1因子は、「育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である」、「子育ては母親一人のものではなく、父親との共同によるものだ」に因子負荷量が高いことから、「父親育児参加」因子と名づけた(説明率, 24.1% : $\alpha = .798$)。第2因子は、「育児は母親が中心となるものだ」、「子どもを育て、家庭を守るのが女性の責任であると思う」に因子負荷量が高いことから、「母性神話」因子と名づけた(説明率, 18.4% : $\alpha = .743$)。

5. 育児不安と育児ストレス、育児ソーシャル・サポート、育児観との関係

育児不安とその他の尺度との関係をみると(表5参照)、4カ月児では、育児不安と育児ストレスの間に中程度の正の相関、育児ソーシャル・サポートの「精神的サポート」と「育児ヘルプ」との間に弱い負の相関が、育児観の「父親育児参加」との間に弱い正の相関が認められた。1歳6カ月児では、育児不安と育児ストレスとの間に中程度の正の相関、育児ソーシャル・サポートの「居場所作り」との間に弱い負の相関が、育児観の「父親育児参加」との間に弱い正の

表5
育児不安とその他の尺度との相関

尺 度	4カ月	1歳6カ月
育児ストレス		
頻度	0.510**	0.548**
強度	0.652**	0.584**
ソーシャルサポート		
精神的サポート	-0.333**	-0.149
育児ヘルプ	-0.346**	-0.022
居場所作り	-0.134	-0.257*
育児観		
父親育児参加	0.367**	0.298**
母性神話	-0.066	-0.115

** $p < .01$. * $p < .05$.

相関が認められた。

考 察

本調査用に作成した育児不安尺度は、中核的育児不安、育児感情、育児時間の3因子から構成されており、それぞれの因子とも、信頼性（内的整合性）と因子的妥当性のある尺度であることが示された。育児ソーシャル・サポート尺度と育児観尺度については、項目を変更したため、さらにそれらの項目で調査し、再分析する必要があるが、育児ソーシャル・サポート尺度は、精神的サポート、育児ヘルプ、居場所作りの3因子、育児観尺度は、父親育児参加と母性神話の2因子から構成されており、それぞれの因子とも、信頼性（内的整合性）のある尺度であることが示された。育児ストレス尺度は、4カ月児と1歳6カ月児の行動や態度を幅広く的確にとらえていた。現在、A町で、2001年、2003年と継続調査中であり、横断分析および縦断分析によって、尺度の信頼性の側面やその他の妥当性の検討を行うことによって、尺度の精度を高めていくことができるかと確信する。

将来的に、本尺度を、乳幼児健康診査でリスクのある養育者をスクリーニングするために使用するのであれば、養育者の負担を少なくし、回答をしやすくしなければならない。そのためには、ステップワイズ式探索的因子分析（Kano & Harada, 2000）を用いて、因子構造を保ったままで、信頼性を損なわない程度に項目数をできるだけ少なくする必要がある。さらに、各尺度を「はい」、「いいえ」の2段階評定とすることや育児ストレス尺度の頻度と育児不安尺度でスクリーニングできる可能性も探っていく必要がある。

相関分析の結果、育児ストレスが多い養育者ほ

ど育児不安が高く、育児ソーシャル・サポートの多い養育者ほど育児不安が低いことがわかった。育児ストレスは避けることができないものが多いため、育児ソーシャル・サポートが育児不安の緩和要因として作用することが示唆されたことは興味深い。さらに、育児ソーシャル・サポートの中でも、4カ月児の養育者には、「精神的サポート」と「育児ヘルプ」が、1歳6カ月児の養育者には「居場所作り」が重要であることが示唆された。この知見は、富岡（2002）と同じである。

核家族で生活している乳児期の子どもを抱える養育者にとって、1日の大半を家で過ごし、育児に専念する生活が、母と子の密室状態となり、社会との接点を失った養育者は閉塞的な状況に陥りやすい。したがって、夫は妻にとっていちばん身近な存在であり、夫からのサポートが非常に重要であることを示している。妻の育児に対する不安や悩み、愚痴などの感情を夫に受けとめてもらえる関係を築いていることが、育児不安を軽減することにつながると考えられる。

一方で、生後14～24カ月の時期は、母子関係にとって一つの危機的状況と言える時期である。幼児期の養育者には、安心して育児の不安や悩み、愚痴を話すことのできる場が重要である。そうした居場所で、同世代の子どもを抱える養育者との関わりから、自分自身の感情を発散させたり、自らの課題を乗り越えていく過程を見出すための重要な手がかりが得られたりするのではないかと考えられる。

養育者の育児観について、父親が育児に参加すべきだと思っている養育者ほど、育児不安が高かったことは、実際は父親が育児に参加していないために父親からのサポートが得られていないのではないかと考えられる。

また、予備調査と本調査の結果から、A町の養育者は、「30歳前後の夫婦で、夫がサラリーマン、妻は専業主婦、近所に家族が住んでいる核家族」であり、現時点では、本質問紙の適応範囲は限られたものとなっている。本質問紙が、さまざまな属性をもった養育者にも適応できるかどうか、対象者の属性の異なる他の地域での調査も行なっていく必要がある。

さらに、妥当性の検討を行わなければならないなどの課題は残っているが、この質問紙の精度を高めていくことによって、乳幼児健康診査での育児相談での参考資料にしたり、健康診査後の家庭訪問や連絡をとる

必要性の有無をある程度判断したりできるため, 乳幼児虐待を予防するシステム作りに大きく寄与すると思われる。

保健所や市町村の保健センターにおける乳幼児健康診査は, 初めて出会う保健師であっても, 養育者の問題がいちばん表に出やすいところである。ここで保健師が, 養育者の育児ストレスをチェックすれば, 養育者の育児ストレスを把握でき, 短い時間の中であっても, 話ができたり, 健康診査後に家庭訪問や連絡を取ることができたりするのではないだろうか。簡単なチェックリストであったとしても, 乳幼児健康診査に来たことで, 養育者が自分の精神状態を知ることができ, 他の人も同じような悩みや不安を持っているのだということを意識する機会を持てるようにすべきであろう。養育者に対して何か考える機会を与えることが, 乳幼児虐待への予防にもつながるのかもしれない。

謝 辞

A町の住民の方々や健康課職員の皆様のご協力なしには, 一連の研究を進めることはできませんでした。心からお礼を申し上げます。本研究をすすめるにあたり, 助言とご指導を賜りました北九州市立大学大学院人間文化研究科の楠凡之助教授, 久留米大学文学部心理学科の津田彰教授に心から感謝いたします。

本研究は, 第60回日本公衆衛生学会総会, 第23回全国地域保健婦学術研究会において発表した。

文 献

- 日下部典子, 坂野雄二. (1999). 育児に関わるストレスの構造に関する検討. *ヒューマンサイエンスリサーチ*, 8, 27-39.
- 池田由子. (1984). *妻が危ない*. 東京: 弘文堂.
- 井上輝子, 江原由美子(編). (1999). *女性のデータブック* (第3版). 東京: 有斐閣.
- Kano, Y. & Harada, A. (2000). Stepwise variable selection in factor analysis. *Psychometrika*, 65, 7-22.
- 柏木恵子, 永久ひさ子. (1999). 女性における子どもの価値: 今, なぜ子を産むか. *教育心理学研究*, 47, 170-179.
- 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次欽也. (1994). 育児不安に関する基礎的検討. *日本総合愛育研究所紀要*, 30, 27-39.
- 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次

- 欽也. (1995). 育児不安に関する臨床的研究: 幼児の母親を対象に. *日本総合愛育研究所紀要*, 31, 27-42.
- 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次欽也. (1996). 育児不安に関する臨床的研究II: 育児不安の本態としての育児困難感について. *日本総合愛育研究所紀要*, 32, 29-47.
- 川井 尚, 庄司順一, 千賀悠子, 加藤博仁, 中野恵美子, 恒次欽也. (1997). 育児不安に関する臨床的研究III: 育児困難感のアセスメント作成の試み. *日本総合愛育研究所紀要*, 33, 35-56.
- 小出まみ. (1999). *地域から生まれる支えあいの子育て*. 東京: ひとなる書房.
- 越 良子, 坪田雄二. (1991). 母親の育児不安と父親の育児協力との関連. *広島大学教育学部紀要第1部*, 39, 181-201.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1991). *ストレスの心理学: 認知的評価と対処の研究*. (本 明寛, 春木 豊, 織田正美, 監訳). 東京: 実務教育出版. (Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984). *Stress: Appraisal and Coping*. New York: Springer Publishing Company.)
- 牧野カツコ. (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉. *家庭教育研究所紀要*, 3, 34-56.
- 永井憲一, 寺脇隆夫(編). (1994). *解説・子どもの権利条約* (第2版). 東京: 日本評論社.
- 難波茂美, 田中宏二. (1999). サポートと対人葛藤が育児期の母親のストレス反応に及ぼす影響: 出産直後と3ヵ月後の追跡調査. *健康心理学研究*, 12, 37-47.
- 佐々木保行, 高梨一彦, 本郷一夫. (1991). 母親の Child Rearing Burnout に関する基礎的研究 (第2報). *鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編)*, 6, 273-282.
- 佐藤達哉, 菅原ますみ, 戸田まり, 島 悟, 北村俊則. (1994). 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連. *心理学研究*, 64, 409-416.
- 田中昭夫. (1997). 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. *乳幼児教育学研究*, 6, 57-64.
- 田中宏二, 難波茂美. (1997). 育児ストレス尺度の作成. *岡山大学教育学部研究集録*, 106, 179-183.
- 富岡明子. (2002). 公民館「母と子の広場」における子育て支援に関する研究 (第1報). *第61回日本公衆衛生学会総会抄録集*, 652.

受付 2003. 8. 29
採用 2003.11. 4

付 録

質問紙

(4カ月児の養育者用)

あなたのお子さまについてお尋ねします。

I 下記のような状況は、どの程度起こりますか？

「ほとんどない(1)」から「いつもある(4)」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください

II その状況に対して、あなたはどの程度ストレスを感じますか？

「全く感じない(1)」から「非常に感じる(4)」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください

	I	II		I	II
	ほとんどない	いつもある	ほとんどない	ほとんどない	いつもある
1 夜泣きをする	1	2	3	4	4
2 かんしゃくをおこす	1	2	3	4	4
3 激しく泣く	1	2	3	4	4
4 ぐずるとなだめにくい	1	2	3	4	4
5 一度泣くとなかなか泣きやまない	1	2	3	4	4
6 一人にすると泣く	1	2	3	4	4
7 病気になる	1	2	3	4	4
8 寝つきが悪い	1	2	3	4	4
9 睡眠時間がまちまちである	1	2	3	4	4
10 湿疹がある	1	2	3	4	4
11 下痢(または便秘)をする	1	2	3	4	4
12 理由もなく泣く(またははぐずる)	1	2	3	4	4
13 おむつでかぶれる	1	2	3	4	4
14 あやすと笑顔が出る	1	2	3	4	4
15 機嫌がいい時に声を出して笑う	1	2	3	4	4
16 抱いてもしつくりこない	1	2	3	4	4
17 哺乳ビンに入れたミルクを飲まない	1	2	3	4	4
18 うつぶせで顔が上がらない	1	2	3	4	4
19 首が座らない	1	2	3	4	4

注. 付録は、継続して調査を実施していることから現在使用中の改訂した質問紙を掲載した。そのため、本論文に記した質問項目数とは異なっている。

(1歳6カ月児の養育者用)

あなたのお子さまについてお尋ねします。

I 下記のような状況は、どの程度起こりますか？

「ほとんどない(1)」から「いつもある(4)」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください

II その状況に対して、あなたはどの程度ストレスを感じますか？

「全く感じない(1)」から「非常に感じる(4)」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください

	I	II		I	II
	ほとんどない	いつもある	ほとんどない	ほとんどない	いつもある
1 おもちゃなどで大人と遊びたがったり、大人の反応を求めたりする	1	2	3	4	4
2 「いや」という拒否が強い	1	2	3	4	4
3 夜泣きをする	1	2	3	4	4
4 睡眠時間がまちまちである	1	2	3	4	4
5 湿疹がある	1	2	3	4	4
6 哺乳ビンを使っている	1	2	3	4	4
7 一人歩きをする	1	2	3	4	4
8 歯みがきを嫌がる	1	2	3	4	4
9 自分で食べたがらない	1	2	3	4	4
10 意味のあることばを話す	1	2	3	4	4
11 下痢(または便秘)をする	1	2	3	4	4
12 まとわりついで離れない	1	2	3	4	4
13 ぐずるとなだめにくい	1	2	3	4	4
14 おむつでかぶれる	1	2	3	4	4
15 指しゃぶりをする	1	2	3	4	4
16 人見知りをする	1	2	3	4	4
17 激しく泣く	1	2	3	4	4
18 寝つきが悪い	1	2	3	4	4
19 理由もなく泣く(またははぐずる)	1	2	3	4	4
20 病気になる	1	2	3	4	4
21 かんしゃくをおこす	1	2	3	4	4
22 少食である	1	2	3	4	4
23 じっとせず、ウロウロ動き回る	1	2	3	4	4

あなたの子育てに対する感じ方についてお尋ねします。
下記の項目についてどの程度あてはまりますか？「全くあてはまらない（1）」から「非常にあてはまる（4）」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください。

1	育児についていろいろ心配なことがある	1	2	3	4
2	母としての能力に自信がない	1	2	3	4
3	子どもを虐待しているのではないかと思うことがある	1	2	3	4
4	子どもと一緒にいるとき、心がなごむ	1	2	3	4
5	自分の時間が少ない	1	2	3	4
6	子どもの発育・発達に気にかかる	1	2	3	4
7	何となく育児に自信が持てない	1	2	3	4
8	子どもといっしょにしていると楽しい	1	2	3	4
9	1人になれる時間がない	1	2	3	4
10	子どもを育てることが負担に感じる	1	2	3	4
11	子育てで失敗するのではないかと思うことがある	1	2	3	4
12	子どもをわずらわしいと思うことがある	1	2	3	4
13	自分のペースが乱れる	1	2	3	4
14	この先どう育てたらいいのか分からない	1	2	3	4
15	その子どもと比べて、落ち込んだり、自信をなくしたりすることがある	1	2	3	4
16	子どもを生まなければよかったと思う	1	2	3	4
17	子どものために仕事や趣味を制約される	1	2	3	4
18	育児意欲がない	1	2	3	4
19	どうしたらよいか分からない	1	2	3	4
20	子どもを憎らしいと思うことがある	1	2	3	4
21	毎日同じことの繰り返しをしている	1	2	3	4
22	家事を全てする時間がない	1	2	3	4

あなたの子育てに対する考え方についてお尋ねします。
下記の項目についてどの程度あてはまりますか？「全くあてはまらない（1）」から「非常にあてはまる（4）」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください。

1	子育てでも大事だが、自分の生き方も大切にしたい	1	2	3	4
2	育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である	1	2	3	4
3	「○○ちゃんママ」でなく、名前前で呼んで欲しい	1	2	3	4
4	子育ては母親一人のものではなく、父親との共同によるものだ	1	2	3	4
5	子どもを育て、家庭を守るのが女性の責任であると思う	1	2	3	4
6	子どもを他人に預けてまで、母親が働くことはないと思う	1	2	3	4
7	育児は母親が中心となるものだ	1	2	3	4
8	子どもが3歳くらいまでは母親が育てた方がいい	1	2	3	4
9	父親の乳幼児期からの育児参加は必要だと思う	1	2	3	4
10	子どもが小さい時には母親の愛情が絶対だ	1	2	3	4
11	育児をしていることが社会から評価されていないと思う	1	2	3	4
12	家庭以外で自分らしく居られる場所が欲しい	1	2	3	4
13	自分自身のために仕事や趣味を持ちたい	1	2	3	4

あなたの子育ての環境についてお尋ねします。
下記の項目についてどの程度あてはまりますか？「全くあてはまらない（1）」から「非常にあてはまる（4）」までの4段階で評価して、あてはまる数字に○をつけてください。

1	私一人で子どもを育てている	1	2	3	4
2	育児の仕方を相談できる人（例えば医師・保健婦などの専門家が）いる	1	2	3	4
3	短時間でも預かってくれる人が近くに	1	2	3	4
4	その日の子どもを夫婦で話し合うことができる	1	2	3	4
5	子どもの心配事があるときに夫（妻）に相談できる	1	2	3	4
6	同じ年くらいの子とも遊ばせる機会がない	1	2	3	4
7	移動の手段が乏しく車がないと外出しにくい	1	2	3	4
8	子どもを預けたり預かったりする子育ての仲間が身近にいる	1	2	3	4
9	夫は妻をよく理解してくれている	1	2	3	4
10	同じ年くらいの子ともをもつ母親と話す機会がない	1	2	3	4
11	母乳育児や離乳食など、子育てについて話し合える人が身近にいる	1	2	3	4
12	夫は妻の代わりに育児や家事ができる	1	2	3	4
13	同世代の子どもを持つ家族とのつきあいが少ない	1	2	3	4
14	子育てをすすめるなかで感じたことを安心して話すことができている人がいる	1	2	3	4
15	歯医者や美容院などに行きたいときに、預かってくれる人がいる	1	2	3	4
16	子育てのことを継続的に話せる機会がない	1	2	3	4
17	子どもの心配事があるときに相談できる人がいる	1	2	3	4
18	子どもと歩いて遊びに行く公園などが身近にある	1	2	3	4

あなたは里帰りをされましたか？ あてはまる番号に○をつけてください。
された場合、期間はどのくらいでしたか？

第一子	1	した	2	していない	()	カ月
第二子	1	した	2	していない	()	カ月
第三子	1	した	2	していない	()	カ月
第四子	1	した	2	していない	()	カ月
第五子以上	1	した	2	していない	()	カ月

里帰りについて思うことや、あなたの町の町の子育ての環境や育児支援について、お困りのことや、ご要望がありましたら、ご自由にお書き下さい。